

「イースターおめでとう」

2014年4月20日

イースターおめでとうございます。今日は、主イエスが十字架の死から復活した、教会にとって最も記念すべき日です。今年のイースターは4月20日と、遅い日付となりました。クリスマスは12月25日と定まった日ですが、イースターは毎年、日にちが違います。これは、春分が過ぎて満月を迎えた後の最初の日曜日がイースターになるからです。

主イエスは金曜日に十字架で殺され、その日の夕方、墓に埋葬され、三日目の日曜日の朝、復活しました。弟子たちは、主イエスが十字架で殺された時、絶望し、裏切り逃げ去ったことが、更に大きな挫折となっていました。ところが、死んだ主イエスの復活と出会う体験をしました。彼らは「主イエスは、生きておられる」と宣教し始め、ここから、キリスト教信仰が生まれてきました。

死人が復活することなど、あり得ないことです。ですから当然、主イエスの復活について、様々な見方と議論があります。長い教会史において、肉を持った復活を、そのまま信じる信仰が主流であったと思われます。しかし、そのような信仰は、聖書の記述とその過程から成り立たないでしょう。復活に関する記述は、紀元55年頃、パウロが書いたコリントの信徒への手紙 — 15章が最初です。パウロは復活した主イエスに出会ったと、復活の事実を力説しています。その中で、復活の体は「自然の命の体」ではない、また「肉と血は神の国を受け継ぐことができず」と、肉の体の復活ではなく、「霊の体」の復活であると書いています。

「霊の体」の復活とはどんなことなのでしょう。「霊」は神との関わりを具体化する力、出来事です。「霊の体」は信仰において受け止められるということでしょう

パウロ後に書かれたマタイ、ルカ、ヨハネの三つの福音書には、復活した主イエスと弟子たちは生々しく出会ったと記しています。これらの記述は復活の喜びを伝えるために書いた著者たちの信仰告白です。ヨハネ福音書に、死人の復活などあり得ないと思っていたトマスに主イエスは十字架で受けた傷を示しながら、ご自身を現されました。これを見たトマスは「私の主、私の神よ」と信じたと加筆されています。その最後に「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と結ばれています。復活を宣教する教会に対し、復活の主イエスに出会いたいという人々の要求に応えた言葉でしょう。

ペトロの手紙 — 1章の8節、9節に「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉で言い尽くせないすばらしい喜びに満ちています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」と書かれています。

宗教、信仰に関しては、相対化、言語化できない世界があります。パウロのいう「霊の体」も、そのことでしょう。キリスト教は、見えない主イエスの復活を信じる信仰です。死人の復活など、あり得ないことですが、主イエスにおいて、この奇跡が起こった。それは、死を超えた永遠の神がおられることの宣言です。この無謀な信仰を受け入れる者は、主イエスの復活の命に与り、神と関わって生きる者とされる。確かな命と深い喜びの世界が開けてくる。復活信仰は、そのような出来事を約束しています。この出来事は、人は皆、かけがえのない人間とされていることを共有し合うことです。